

令和6年度 第4回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和7年(2025年)2月17日(月) 13時30分～15時00分

2 場 所 白馬高校会議室

3 出席者 委員14名

以下敬称略

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・草本朋子(白馬インターナショナルスクール理事長)
- ・笹川陽子(白馬高等学校PTA、スキー部後援会役員)
- ・白戸 洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・中村和彦(白馬村立白馬中学校)
- ・小林かおる(小谷村立中学校長)
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・松澤 泉(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・小林雄一(白馬高等学校長)

欠席委員

- ・松澤忠明(PTA会長)

その他の出席者

- ・井出敦(高校教育課高校再編推進室主幹指導主事)
- ・土橋邦彦(高校教育課高校再編推進室主任指導主事)
- ・小谷村副村長、白馬村・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係局長補佐、主査、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(藤森要白馬高等学校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(井出敦高校教育課高校再編推進室主幹指導主事)

- 第3回の運営協議会では、株式会社Prima Pinguino(プリマペンギノ)協力の下、高校魅力化プロジェクトのビジョン策定のため、グループによるワークショップを実施。学校で過ごす時間だけでなく、放課後や休日の過ごし方などの生活全般を含めた広い視点に立ち、3つのテーマについてさまざまなアイデアを出し合った。今後のビジョン策定に向け、有意義な会議となった。
- 前期選抜試験においては、国際観光科のみならず、普通科においても定員を大きく超える志願募集があった。学校長、先生方、両村の方々の多大な協力のおかげであると感じている。

(3) 学校長より挨拶(小林雄一白馬高等学校長)

- 先週10、11日、2日間にわたり前期選抜を実施。19日の入学予定者発表に向け、校内で準備を進めている。今年度は、関係者の方の長年にわたるご支援の積み重ねにより、国際観光科では定員30名に対し48名が受験し、倍率は1.60倍。普通科では、定員20名に対し23名が受験、倍率1.15倍となった。昨年度に比べ、より多くの中学3年生に志願、受験をしてもらったことを有難く思う。志願者の出身中学別人数等の詳細は公表していないが、地元を含む県内、県外ともに受験者数が増加。明るい兆しと捉えている。
- 地元の子どもたちを皆で丁寧に支え、育てていくこと、それに加え、白馬高校の魅力化、特色化

を一層推進し、地域の方や県外の受験生の多様なニーズに応えていくことを目指し、取り組みを進めていきたいと考えている。

- 第3回運営協議会以降も、地元の方のご指導、ご支援の下、特色のある教育活動を実施してきた。進路ガイダンス、地元の食材を学ぶ特別調理実習、断熱改修ワークショップ、外国人観光客へのインタビュー、糸魚川高校との交流、校外における探究活動の発表会、2日間にわたる全校スキー・スノーボード教室、地の利を生かした実践的な英語教育の取り組みなど。これらの活動の様子は写真を交えて後ほど説明。
- 本会議では、今年度の重点目標に向けた取り組みの進捗状況、今年度卒業生の進路状況についても、報告させていただく。また資料を用いた学校の報告だけでなく、代表生徒による活動報告の場も設けている。

(4) 報告事項

① 学校からの報告事項

<小林校長>

- 生徒の主な活動について（P 4～7）。P 4 上段の写真は、進路に向けた意識向上を目的に、1 年生対象に行われた進路ガイダンスの様子（11 月）。下段は 1 年生の家庭総合の様子。地元ホテルの料理長を招き、地元食材を活用した調理実習やもてなしについて、実践的な学びを行った。日々の教育活動の中で、地元出身の生徒はもちろんのこと、海外や県外からの生徒に対しても地域の魅力を伝える取り組みを進めてきた。生徒たちが興味を持って主体的に生き生きと活動し、有意義な学びの機会になったと感じている。
- P 5、断熱材改修ワークショップの様子。本校では 5 年前に県立高校の中でも先駆けて教室の断熱改修ワークショップを実施。今年度も地元大工の方のご協力の下、生徒が中心となって行った。下段の写真は、『探Qフェス』の様子。『探Qフェス』は、塩尻市の長野県総合教育センターで開催される発表会。県内 46 の高校から約 350 名の生徒が参加。県内の高校生が取り組んだ探究活動の成果を発表し、他校の取り組みなどを共有する場として開催された。普通科や専門学科、理数科など様々な学校の生徒たちが一堂に会し、互いの研究成果を発表し合った。熱気あふれる発表や交流が繰り広げられ、高校生の真剣な眼差しと独創的なアイディアに満ちた探究活動の数々に、来場者からは驚きと感動の声が多数あがった。本校から参加した職員、生徒たちにとっても大変有意義な時間となった。
- P 6 は、新潟県立糸魚川高校との探究活動における交流の様子。上段の写真は本校生徒が糸魚川高校を実際に訪問、発表を行っている場面。下段は、糸魚川高校と合同で行った学習成果発表会（白馬フォーラム）の様子。両校とも、学びを礎とし、社会貢献の志を抱き、将来はグローバルな視点をもって、地域と日本、そして世界を支える存在になり得る生徒の育成を目指している。共通点も多くあるので、生徒同士はもちろん、教員にとっても良い刺激となった。
- P 7 は本校の伝統行事であるスキー、スノーボード教室の様子。地元スキー場協力の下、全校生徒が 2 日間参加。天気にも恵まれ、絶好のコンディションの中での開催。特に 1 年生の県外出身者の中にはスキー初体験の生徒も多く、大変貴重な経験となった。レベル別に分かれ、それぞれの指導員に講習を受け、生徒たちの真剣な表情や笑い声が印象的だった。下段の写真は、観光英語の授業で行われたフィールドワークの様子。地域ならではの環境を生かし、実践的に英語を学ぶ取り組みを引き続き進めていきたいと考えている。
- P 7、一番下に紹介してあるのが、今年度決定した本校のマスコットキャラクター。生徒たちが

名付け、「はくまる」に決定。生徒がデザインを考案し、さらに意見を取り入れながらブラッシュアップを重ね、完成。今後は全国募集を含めた広報活動など、さまざまな場面で活用していきたい。

- P 8には本校の重点目標、P 9からは目標に対する本校の取り組み状況をまとめたものを記載。各目標に対する達成状況の詳細は右の欄に記載。「◎」は「計画を上回って達成した項目」、「○」は「計画通り実施できた項目」、「●」は「計画を下回った項目」。それぞれの項目の先頭に記号をつけてある。また特徴的な取り組みや数値などについては、達成状況の欄にアンダーラインを引いてある。
- P10(3)「個に応じた学習支援」の達成状況「●（計画を下回った）」についての説明。公営塾では日頃から生徒の希望や実情に応じた効果的な指導を行ってもらっているが、生徒の進路希望の実現に向け、学校としてもさらに情報交換を進め、情報共有し、より連携を深めていければと考えている。
- P14、今年度卒業予定者の進路状況。進学、就職を希望した生徒全員が第一志望の進路を実現。右下に進路別円グラフを記載。

② 白馬高校支援係からの報告（白馬山麓事務組合）

<松澤局長>

- 本会議では、魅力化プロジェクトビジョンとアンケート調査の結果報告をしていく。
- アンケート調査の結果について、1点説明。「高校選びの基準」を聞く項目では、最も重視した基準として「自分の学力に合ったもの」はもちろんであるが、「部活動の充実」という回答の割合も高いことが見てとれる。実際に中学の保護者と話をする中で、「部活動」という言葉が非常によく出てくる。やはり部活をしたい子どもが多いのだなという印象。
- アンケート調査に関する回答数は、中学生徒が126件（白馬中88件、小谷中38件）、中学保護者21件（白馬中13件、小谷中8件）、高校生徒が29件、高校保護者32件となっている。
- 魅力化プロジェクトについての説明。魅力化プロジェクトは、地域を支える人材育成を高校と地域が連携しながら取り組みを進めてきた。今までプロジェクトのビジョンがなく、それぞれの役割が定まっていなかったことから、ビジョン策定を行うこととした。
- 第1章（P3～10）として、「高校の現状と魅力化プロジェクトの必要性について」、第2章（P11～）では「魅力化プロジェクトが目指すもの」（『地域に根差しながらも世界に通用するグローバル人財づくり～多文化共生と大自然のフィールドの中で、自分の「好き」にとことん挑戦し、未来を創造するシュプールを描け！～』）、そして第3章（P12～）では「魅力化プロジェクトの取り組み」として、5つの基本方針を記載。
- 5つの基本方針として、（1）魅力化プロジェクトの推進、（2）特色ある学びの支援、（3）学力向上・進路実現のための支援、（4）生活環境の支援、（5）生徒募集の支援、を行っていきたいと考えている。
- 取り組む事業について、今まで「誰が」「どういう役割で」やるのかが分からなかったので、各取り組みに対し「推進担当」を設け、関係者が主となって進めていきたいと考えている。
- 計画期間（P14）は、令和7年～9年度の3年間。各年度ごとにブラッシュアップして、より良いビジョンにしていきたい。計画期間が終わった時点で評価を行い、次の計画に移っていきたいと考えている。

(5) 生徒活動報告

- ① 信州つばさプロジェクト韓国コース研修（『小さな外交官』1年生徒Aによる発表）
 - 信州つばさプロジェクト JENESYS 2024 韓国コースに長野県代表として参加。1週間の短期留学を体験。今回は、1週間で学んだことや感じたこと、これからどのようなアクションを起こすかに

について発表する。

- 内閣府が実施した「韓国に対する親近感に関する調査」によると、18～29 歳、いわゆる Z 世代は約 6 割が韓国に親しみを感じている。一方で、30 代から上の世代になるにつれ、親しみを感じる割合が減り、特に 40 代では約 3 割の人しか親しみを感じていないことが分かる。このような韓国に対する印象を、実際に韓国で魅力を学んだ自分たちの手で変えたいと思い、アクションプランを考えた。
- 信州つばさプロジェクトとは、「長野県の高校生が、信州に根差した確かなアイデンティティと、世界に通じる国際的視野を持ち、将来世界の様々な分野で活躍できる人材として成長できるよう海外留学を推進するとともに、社会全体で留学への機運を盛り上げる仕組みをつくり、県・民協働で高校生の留学を支援すること」を目的とした事業。
- 1 校あたり 1～3 名、計 44 名が参加。
- 韓国での 1 週間について紹介。韓国の高校、突馬（ドルマ）高校に行き、高校生同士で交流。たくさんの経験や知識を得ることができた。日本の高校とは少し違う雰囲気、「自分のパートナーはどんな人が来るのかな」と緊張していた。パートナーと対面した時、体格がよく怖い印象で、「大丈夫かな」と不安な気持ちでいっぱいだったが、話してみるととても優しく、いつの間にかいろいろなことを話していた。韓国語があまり話せないのも、スマホでの翻訳やジェスチャーを通して交流。校舎を案内してもらったとき、韓国の高校生たちは私たちに快く迎えてくれ、気がつく私の周りは韓国の高校生だらけとなった。仲良くなった韓国の高校生たちと一緒に昼飯。昼飯は韓国ドラマで見るのと全く同じだった。給食を食べた後は、グラウンドでサッカーをして遊んだ。皆、ボールを回してくれて、久しぶりにお昼後に体を動かし、懐かしい気持ちにもなった。午後は街の探索。カラオケに行き、韓国内で JPOP が流行っていることに気づき、驚いた。打ち解けたパートナーともお別れの時間。感謝の言葉を頑張って韓国語で伝え、一緒に記念撮影をした。
- 今回の交流で学んだことは、「日本の高校生とあまり変わらない」ということ。年も近いので、考えることもほぼ一緒だった。一日でこんなに仲良くなれたのは、言語の違いや文化の違いを受け止めたからだと思う。
- 東国（トングク）大学での体験について。韓日文化コンテンツ産業の現状と未来について講義を受け、両国で文化コンテンツの連携と協力体制を整備することが必要だと学んだ。日本語学科の大学生たちとグループごとに交流。大学生は日本語がペラペラでコミュニケーション能力も高く、とても驚いた。
- 民族村での体験について。民俗村では韓国の伝統的衣装のチマチョゴリ、パジチョゴリを体験。民俗村は昔の韓国をイメージしたような場所で、伝統的な衣装を見ることができ、タイムスリップした気持ちになった。印象に残ったことは、パジチョゴリを着ていた時に、韓国の人や観光客に写真を撮られたこと。日本人ではない気分になった。
- 他にも KPOP ダンスを体験したり、首都ソウルの中心にあるヨンドンに訪れたりした。ヨンドンは韓国のエンターテインメントやトレンドの発信地。日本の観光客も多くいた。KPOP や韓国トレンドは、宿泊施設や飲食店といった観光業、その他産業に対して経済的な影響を与えていることに気がついた。実際に韓国政府は文化外交の一環として、KPOP を積極的に世界へ発信。国際的にも知名度が高く、私たちにも馴染み深いものとなっている。このような情報発信の影響で、若い世代は韓国に対する興味・関心が高いことが分かった。
- 両国のいろいろな違いや似ているところなども発見。特に大きな違いを感じたのは食事について。日本では食器を持たずに食べることや出された食事を残すことは失礼にあたるとされている。しかし韓国では、食器を持たずに食べること、食べきれないほど振舞うのが最高のおもてなしであり、そのため食事を少し残すことがマナーとされている。このように、食事に関するマナーが異なっている。文化の違いを知らなければ、韓国に対してマナーがなっていないと感じるだろうし、韓国への親しみを感じない要因にもなっていると思う。
- 韓国に対する偏見や印象、特にすでに偏見を持っている上の世代の印象を変えたいと思う。「まずは自分の周りの人の韓国に対する印象を変え、その輪を広げていきたい」という強い気持ちで、次のようなアクションプランを考えた。交流関係を引き続き持続し、私たち以外の高校生にも韓国と関わってほしいと思っている。交流の第一歩として、手紙や感謝の品をドルマ高校に

送り、オンラインでの交流をしたいと考えている。そして実行したことを振り返り、新しい企画を考え、最終的な目標は韓国と日本を行き来し合えるような環境にしていきたい。

- 韓国で1週間を過ごし、考えや日本での過ごし方が少し変わった。韓国語の勉強も始め、単語を覚えたり、仲良くなった子たちとインスタグラムのDMで話したりしている。私は韓国語で話し、逆に韓国の友達は日本語で話すこともある。海外の友達ができたことで、新しい趣味を見つけることもできた。自分の経験から言えるのは、韓国と日本はもっと互いの習慣や文化を知り、理解すべきだということ。日韓の歴史にはさまざまなことがあり、対立や問題が現在もある。歴史を変えることはできないが、未来は私たちの手でつくることができる。互いに受け入れ、学び、手を取り合うことが必要だと感じる。その一歩として、今回学んだことを積極的に発信し、韓国に対する印象を変えていきたい。アクションプランを成功させ、日本の魅力、韓国の良さを発信できる『小さな外交官』となり、日韓関係をより良いものにしていきたいと思う。

<白戸会長>

- ご質問・ご感想はあるか。

<丸山委員>

- 日韓の相違には、食事以外にどんなものがあったか。

<生徒 A>

- 支払い方法において、韓国は日本よりキャッシュレスが進んでいる印象。

<中村（義）委員>

- 参加した生徒の中に韓国語を話せる生徒はいたか。

<生徒 A>

- 全員ではないけれど、話せる子もいた。話せない生徒は、英語の単語を言い合ったり、スマホの翻訳機能を用いたりして交流を図った。

<白戸会長>

- 自分の生活や高校生活を送る上で生かせることはあったか。

<生徒 A>

- 韓国に行ってから「とにかく韓国に関わりたい」という気持ちがあって、韓国の友達とメールなどでつながっている。韓国の今の状況なども教えてくれるので、そうした情報を親など周りに話すことも増えた。

②北アルプス学（『グリーンシーズンの Hakuba Valley を知ろう』1年生徒3人による発表）

- 県外在住の方や県外生に白馬のイメージを聞いたところ、特に冬のイメージが強いことが分かった。確かに白馬のパウダースノーは世界的にも有名。また、あまり知られてはいないが、民宿発祥の地でもある。明治40年ごろに山岳ガイドが観光客を自宅に泊めたことが始まりだと言われている。
- 冬のイメージが強く、観光客数が一番多いのは冬だと予想されるが、統計によると実は観光客数が一番多いのは8月（グリーンシーズン）。
- グリーンシーズンとは4月中旬から11月中旬の期間を指す。
- 私たち1年生は、昨年10月に5つのゲレンデを訪れ、現場の方に話を聞いたり、質問をしたりするフィールドワークを実施。
- 1つ目は白馬五竜。白馬五竜には高山植物園があり、白馬の高山でしか見られない植物を見つけることができる。またハイキングコースもあった。八方尾根では、リラックスしながら景色を眺め、ゆっくりできる兎平テラスがあり、ハイキングコースでは景色の良い舗装された道を歩くことができる。岩岳にある『ヤッホースイング』では、北アルプスを眺めながら、のびのびとブランコを漕ぐことができる。また日本有数の長さを誇るMTBのコースもある。梅池自然園には日本有数の高山湿原があり、さまざまな植物を見ることができ、景色もとてもきれい。実際に訪れたときは、高齢者の方が多く、幅広い年齢層が遊びに来ている印象。『つがいけ WOW』にはウォーターアドベンチャーなどがあり、子どもに人気となっている。最後にコルチナを紹介。コルチナにはアドベンチャーワールドという施設がある。人工的なものではなく、自然の木をそのまま利用して作られている。イングリッシュガーデンはスキー場の横にあり、庭師と担当の方がたくさん会議をして、一緒にデザインを考えている。高齢者の方に人気の施設となっている。

- Hakuba Valley の各地を訪れて分かったことの一つに、「どのような人をターゲットにして営業しているのか」があげられる。ターゲットには2つのタイプがあり、1つ目はセールスターゲット、いわゆる「言わなくても来てくれる人」のこと。こうしたターゲット層にどんなサービスを提供するかを施設側は考えている。例えば、設定モデルが「50歳男女、県内在住」だとすると、情報収集は紙媒体のパンフレット。写真スポットやライブ、バリアフリーの充実などを行っている。2つ目のターゲットは、コミュニケーションターゲット。これは、「施設側が来てほしいと思っている人」のことを指す。施設側はコミュニケーションターゲットに来てもらうためのイベントを考案。設定モデルを「県内在住のカップル、リフレッシュのために白馬に来ている」とした場合、その人たち向けにオシャレなカフェなどを SNS を通して発信している。
- グリーンシーズンの Hakuba Valley の特徴として、「子どもから大人、カップルまでの幅広いターゲット層」、「貴重で豊富な北アルプスの自然を生かしたアクティビティ」、「心安らぐリフレッシュのできるスポット」などがあることが分かった。
- 「〇〇目線で何があったら利用したいか」については、「地元目線」だとアウトドア系のアウトレットの充実。スノーピークなどの施設は点々としていて行きづらいという声があった。それらを一つにまとめた、複合型施設があるとよいと言っていた。「観光客目線」では、村男（白馬村キャラクター）のフォトスポットが欲しいという声があがった。「高校生目線」としては、（生徒D）白馬名物がほしいかなと思う。蕎麦しかないイメージがあるので、他に名物があればと思う。（生徒C）海外の方が多いため値段が高くなってしまいうこともあり、学生が観光しづらいというのが現状。学割などの制度の充実があると助かる。また、カメラやGoPro、自撮り棒の貸し出しがあると便利だと思う。京都であれば着物の貸し出しがあるので、同じような感じで、レンタルなどがあるといい。（生徒B）県外から白馬に来て、イベントの充実、アクセスの充実が、他県と比べて少し不便だと感じる。気になるイベントはあるが、イベントの場所まで行くのに少し不便で行く気にならないこともあるので、アクセスが便利になるといいなと思う。
- 学習を通して学んだことについて。白馬の現状として、「行政」と「地域」が分離していると感じた。例として SNS の発信力（インスタグラムのフォロワー数）を上げてみる。観光地として白馬と似た環境であるニセコと比べると、白馬が3.8万人、ニセコが7.9万人。なぜこうした差が出ているのか。おそらく、ニセコは「行政」と「地域」が密接に関わりながら SNS 発信を行い、地域の魅力を最大限に生かした方法を行っているからだと思う。一方、白馬は「行政」と「地域」が分離しているため、地域の魅力を十分に発信できておらず、グリーンシーズンの良さなどを伝えきれていないのではないかと感じている。
- これからできることとして考えられるのが、1つ目に「観光資源を最大限に生かすこと」。北アルプスの自然を最大限に生かせるよう、「行政」と「地域」が話し合い、企画を立て、プロジェクトとして活動をしていくことが大切だと思う。2つ目に「地域の魅力を引き出すこと」。最近の若者は SNS に敏感であるため、SNS に力を入れることでより多くの人を呼び込むことができるのではないと思う。

<白戸会長>

○ご質問・ご感想はあるか。

<草本委員>

○丸山委員への質問となってしまうが、白馬村はフェイスブックのフォロワー数が自治体の中では日本一と聞いており、今チェックをしてみたら16万ほど。現在も日本一となっているのか。

<丸山委員>

○フェイスブックは日本一を維持していると思う。Instagramに関しては、行政でやっているのではなく、観光局が運営している。つまり行政主導というわけではなく、いわゆる担当の広報団体が運営している状況。Instagramへの取り組みが比較的遅かったのかもしれない。

○特産品の少なさは、確かに昔から言われていた課題でもある。何か具体的にアイデアはあるか。

<生徒D>

○SNS メインで考えると、私は正直、味などはさほど大切ではないかと思う。見た目が大事。地元の食材を使うなども大事だとは思いますが、難しい部分もあると思うので。エコーランドなどで可愛いものがあるといいなと思う。

<草本委員>

- 生徒の皆さんはフェイスブックなどはやらないのか。
- <生徒一同>
 - やらない。Instagramが多い。
- <草本委員>
 - おそらく今はInstagramやTickTokが主流だと思うが、生徒たちのような若い世代にアピールできるSNSが弱いというのは問題かなと思う。
 - 特産品については、以前白馬高校の生徒が地域の方と協力してハンバーガーを考案したこともあった気がするが…。
- <太田委員>
 - ハンバーガーについては、原価が高く、発売するときに値段を抑えはしたが、続けていくのに難しく、割と早い段階で消えてしまった経緯がある。
 - 都会の友人や周りから「白馬すごいんでしょ」と言われることがある。傾向として、白馬の物価が高いというイメージ。外国の方にとってはいいのかもしれないが、高校生や村内は動きづらいというのがある。村民や地域住民への割引がもう少し欲しい。若い人がそうした声をあげていくのは大切で、有効だと思うのでぜひ声を上げ続けてほしい。
- <丸山委員>
 - 学割などはいいアイディアだと思う。地域通貨も検討している。行政としてできることはやっていきたい。
- <笹川委員>
 - 学生目線で情報を発信するとしたら、どんな情報をどんな風に発信するといいと思うか。
- <生徒B>
 - 私はリール動画の「〇〇に行ってみた!」のような投稿をするといいと思う。本当は白馬村がやっているけれど観光客が行ったような動画を作成すると、意外と目に留まると思う。白馬グルメみたいなものもあるといいのではないかなと思う。
- <生徒C>
 - 私は実際に(県外から)白馬に来て、今まで知らなかった松川などに遊びに行くことがある。こうした地元にしか知られていない場所や隠れ家スポットを発信していくといいと思う。
- <生徒D>
 - アルバイト終わりに、お客さんとして来ていた外国人と一緒に帰ったことがある。外国人が本当に多いので、「白馬で留学できます」のように、少し大げさだけれど、現地にいる県外生の率直な意見などを入れていくといいと思う。
- <白戸会長>
 - ゼミの学生と一緒に松本の商店街のことを調べたことがあるが、「常連」と言われる人が多い店ほど生き残る、ということが分かった。常連と言われる人たちが「いつから常連なのか」というのは、「子どもの頃に親に連れられて一緒に食事をした」や「中高生のころ、そんなにお金を使わなくても500円ひとつ持っていれば食べられた」、「若いころに通った」など。逆にお金がないと入れない、要するに中高生を大事にしないところは、なくなっていくことが多い。今の若い世代が10年先、20年先のメインターゲットになっていく、ということを踏まえて話を進めなくていけないと改めて思った。
- <生徒C>
 - 先日ニセコスタディーツアー(白馬高校主催)に参加した際、ニセコは断熱に非常に力を入れているという話を役場の方に伺った。白馬村はどの程度力を入れているのか。
- <丸山委員>
 - 力を入れてはいるが、なかなか進んでいないのが現状。ニセコは行政と民間が連携して作っている、参考にしたいと思っている。
- <生徒B>
 - 視察で訪れたニセコの断熱住宅は、ストーブをつけなくても暖かいという話を聞いた。白馬村も将来的にそうした住宅を建てるともっといいのではないかなと思う。

(6) 意見交換

<白戸会長>

○学校の活動報告や魅力化プロジェクトのビジョンの内容を踏まえ、自由にご意見をいただきたい。

<草本委員>

○DX 推進事業について、どのくらい進んでいるのか。以前は、地域の方も利用できるような環境にしたいという話だったが…。

<小林校長>

○現在、教室の改修工事を行っている。自由自在にワークスペースが組めるようなイスや机、3Dプリンター2台、パソコンも購入済み。本年度中には環境整備が完了する予定。将来的には地元の小中学校、地域の方にも活用してもらい、探求的な活動ができる空間にしていきたい。

<丸山委員>

○トイレの改修は進んでいるのか。

<小林校長>

○トイレは来年、再来年をめどに。中間改修工事に関しては、設計業務が具体的に始まっている。工期のスケジュール等も決定しつつある。

<中澤事務長>

○中間改修工事の進捗状況について。設計業務は3月で完了。工事に入っていくのは来年度から。令和7年度、8年度のおよそ2年間かけて行う予定。トイレはもちろんのこと、各教室の断熱、廊下等の内装、外装もきれいにしていく。詳しいスケジュールについては、来年度発注、7月ごろ契約、入札。10月ごろから着工予定。教室として使用しながらの工事となるため、時間もかかる見通し。令和9年の3月に工事終了を目指している。

<草本委員>

○生徒の進路を見てみると、スポーツ系に進む生徒が多い様子。白馬村で生活していて圧倒的に少ないと思う業種は設備や電気等の分野。高齢化も進み、頼んでもなかなか来てもらえない。環境に良い新しい技術を取り入れていきたい、と思っても引き受けてくれる業者がないこともある。オーストラリアなどの諸外国では、設備業者は非常に重要な職業として認識され、地位も確立されている。設備や電気等の分野は、AIの時代が来ても絶対に仕事はなくなる将来性のある職業。地元からそうした職業に就く人が出てくると良いと思う。本来であれば工業高校の分野かもしれないが、地元ニーズがあり、重要な職業であることから、進路選択の一つとして高校のデュアルシステムで体験していくことは可能だろうか。

<井出主幹指導主事>

○池田工業高校では、3年生の段階で、授業の一環として半日外に出て体験する取り組みをしている。確かに電気、配管などの施設整備、製造の人手不足が見られる。工業高校のみならず、生徒を送ってほしいと企業からの要望も多い。課題としてあるのは、「ものづくりの楽しさ」を高校の進路選択からではなく、もっと小さい頃から体験活動を通じて知ってもらい取り組みが必要だということ。工業高校を卒業して就職を考える際、生徒の9割が地元に戻ってきて就職をする、という傾向がある。今後、そうした専門職の育成を考えていかなければならないと自覚し、研究をしていきたいと思う。白馬高校でのDX推進事業も、デジタル系の分野とはなるが、「手を動かしてものづくりをする」という点から、インフラ業界に興味を持つ生徒が出てくることを期待している。

<白戸会長>

○商業を勉強してきた学生の中には、JAに就職し、保険分野ではなく農業の指導員になった学生もいる。大学では別の勉強をしていたけれど、建設業を営む実家を継いで、そこから新たに職業訓練をする人もいる。高校や大学の時にそうした勉強をしていたから、ということではなく、人生の中でいろいろな選択肢があって、いろんな視点をもって生きていくことが大切だと感じる。

○学校で育てる中で、地元を支える生徒、人材が生まれるのではないだろうか。実際に、建設事業を地元が発注するのと外部に発注するのでは、金額的にも大きく違ってくる。以前、「白馬高校がなくなったら地元からどのくらいのお金が消えていくか」をシミュレーションしたことがある。大体1か月に生徒ひとりあたり5～6万、年間で72万、高校3年間分で×3。家庭に2～3人ほどの子どもがいるとすれば、約1千万近いお金が村の貯金からなくなっていくことになる。

○大事なことは、地元はどうお金が落ちるかを考えながら教育を考えるということ。経済循環の視

点で考えると、特に建設業界では、国の予算を使って大型施設を作る場合、結局はゼネコンが請け負うことになる。以前栄村が、村の左官、電気屋、浄化槽の設置、設置からメンテナンスまでを全部一括して行う株式会社を立ち上げ、村の中で回していくという仕組みをつくったと聞いたことがある。白馬高校の役割の中で、そうした人材を育てていく意識を持つことは大事なことだと思う。

<草本委員>

○そうした職業の重要性などを将来のことを考えるときに伝えていければいいなと思う。

<中村（和）委員>

○今年度白馬中学校から白馬高校に志願した生徒がとても多かった。中学校の子どもと話してみると、高校の魅力がしっかりと伝わっている印象を受ける。今回、活動報告をしてくれた生徒の皆さんや先日わざわざ中学校に足を運び自家製のお茶を振舞ってくれた生徒など、本当に一生懸命、いろいろな子たちが頑張っていると感じる。

○グリーンシーズンのことを調べたり、オーバーツーリズムにならないためにどうすべきかを考えたり、中学校も高校と同じようなテーマで学習を進めている。ぜひ連携を図り、高校生とコラボしていきたい。その中で子どもたちも大きく成長できるのではないかなと思う。また、英語教育にも力を入れ、武器のひとつとして、いろんな面で高校とタイアップしていければ、白馬がより良い場所になるのではないかと期待している。そのために深い関係を築いていきたい。

<小林校長>

○地元の子は地元で丁寧に育てる、ということを基本の軸として捉えている。一方で、県外や海外の生徒も受け入れ、より発展的な成長を目指して、取り組んでいければと思う。白馬中学校、小谷中学校とも連携を深めながら、長期的な視点で子どもたちを育てることができればと思う。

<相沢委員>

○以前、白戸会長が「教育には時間がかかる。今日やったから来年すぐに成果が出るというものではない」と話していた。国際観光科ができた当初は、とにかく生徒の話を聞きながら手探りで進めてきたと思う。それに比べると、今は子どもたちも成長しているし、先生方も子どもたちのニーズに対応していくために勉強されているのだろうなと感じる。

○今回の発表の様子を見ると、生徒間で対話を大切にしている印象。「互いに相手の意見は認めるけれど、違うところもあるよね」といった感じで、互いに成長し合っている、認め合っている姿が見られ、そうした学びが大事なのだなと思った。これからあの子たちが基盤となって、学校全体が成長していくのではないかと期待している。周りも対応していけるように環境を整える必要があり、支えられる部分、協力できるところは協力していきたいと思う。

(7) 県教育委員会より

<井出主幹指導主事>

○コロナ禍では手探り状態で学校運営を進めていたが、現在は、海外や村外に出て活動する場面も多くなったのだなと改めて感じた。生徒たちの発表は、新しい経験ができるようになり、さらに発展しているのが目に見える報告だったと思う。県教育委員会では、各高校で取り組んでいる内容に磨きをかけてもらう目的で、9月に高等学校の特色化に関する方針をまとめた。白馬高校を見ると、本当に先進的な取り組み、地域を巻き込んだ学校づくりをしているのだなと改めて思う。

○先日、県教育委員会では再編基準の見直しについての意見交換が行われたが、「特色」というキーワードがやはり出ている。単なる数字上の話ではなく、「その学校にどんな特色があるのか」、「何を高めようとしているのか」、「どんな取り組みをしていくのか」を見ていくことが大切だと感じている。白馬、小谷のことを考える中で、地域を巻き込みながら、よりよい形になるよう、今後も探求していければと思う。

(8) 閉会の言葉

以上で、第4回学校運営協議会は終了。